

白い、いるかと青い海

牧原 辰

絵 君島美知子



白 い い る か と 青 い 海

原 辰
絵・君島美知子



913

牧原 辰

白いいるかときい海

講談社 1980

206p. 22cm (児童文学創作シリーズ)

まきはら たつ

白いいるかときい海

昭和55年10月8日 第1刷発行

定 価 980円

著 者 牧原 辰

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話 東京03(945)1111(大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

©Tatu Makihara 1980

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかいたします。

8093-190217-2253 (0)

(児一)

も
く
じ



はじめに、海への喫茶店—— 6

第一章 サヨと、ばあちやと—— 9

第二章 風がふきぬけていく—— 27

第三章 ゆめを食うバク—— 38

第四章 おはよう、ぼくは、タアチ—— 57

第五章 ピパねえさんの目の中に—— 69

第六章 サヨの入り江で—— 90

第七章 ぶらんこがゆれる—— 107

第八章 はまべのむかし話—— 127

第九章 ちぎれて、とぶ雨—— 145

第十章 手をつなぐのさ—— 171



第十一章^{しちじゅう}

たいこがひびく

185

そして、いるかは帆^ほに風うけて

199



白
い
い
る
か
と
青
い
海

牧原 辰／君島美知子 絵



はじめに、海への喫茶店



東京駅から南へと下るブルートレイン「富士」にのって、車中で一夜をすごし、目がさめた朝、まどの外をみると、左手に海がひろがっている。かとおもうと、海は木立のむこうにかくれ、列車は一声、きてきを鳴らし、トンネルにはいる。そして、トンネルをぬけると、目のまえがきゆうに明るくなって、ふたたび左手に青い海がひろがる。

それを何度かくりかえし——良子さんは、ようやくのことで、その町についた。ほっとしたのと、さすがに長時間の車中の旅で、つかれもあって、良子さんは、おりた駅のベンチにひとやすみした。

長い髪がさらりと背にながれ、あじさい色のまる首シャツに、色あせた紺のジーンズ、白茶け

た皮のサンダルをつっかけ、荷物といえは、かたにさげた麻ぶくろ一つ。その麻ぶくろをかたわらにおいて、良子さんは、大きくのびをして、目をとじた。

ねむるつもりはなかったのだが、つい、うとうととして……。

「もし。あんた。どこか、ぐあいでもわるいとな。」

「あ。いいえ。」

目をあけた良子さんのまえに、あから顔の駅員のおじさんが立っていた。そのひとなつこいひょうじょうに、良子さんは、ふと、半年まえになくなったおとうさんのことをおもいだす。

「だいじょうぶです。ちよつとつかれて……。ありがとう。」

良子さんは、立ちあがって、にっこりわらう。

「あの、この町で、海にいちばん近い喫茶店、どこですか？」

「なんて（なんだって）？」

「喫茶店です。海になるべく近くのほうがいいんですけど。」

「わっどんは、よう知らんな。ちよい待ちない。わかいもんに、きいてむっわ。」

あから顔のおじさんは、わかい駅員さんをよんだ。

わかい駅員さんは、よく知っていた。

「あつですよ、海つぺたに。——あんですね、こん道をずっと道なりにいくつてす。そうすつとおかになつとるんです。そんなおかん上に、サロン・ド・テちゆう喫茶店が、白いたてものですか、いき、わかつてすよ。」

「サロン・ド・テですか？」

「ええ。いい喫茶店ですがね。ぼくも、よう、いくつてすよ。駅うらからもいけるつてすがね、うんにや、こりや遠まわりになつてすね。」

「ありがとう。それじゃあ——。」

良子さんは、わかい駅員さんと、あから顔のおじさんとに、お札をいって、駅をでた。

おしえられた道を歩いていくと、やがて、まつ林のおかがみえてきた。

波の音がきこえる。おかのもうは、海なのだろう。その海からの風が、潮のにおいをはこんでふきぬける。良子さんの長い髪が、おうぎのようにゆれては、なびいた。

「きつと、いる。この海の近くに、あのふたりは、きつと——。」

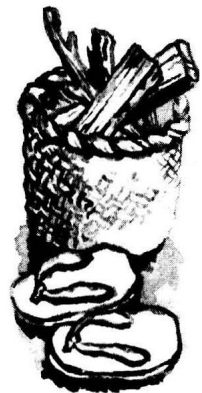
良子さんは、心のなかでそうつぶやきながら、おかの上にみえた白いたてものめざして、まっすぐに歩きはじめた。

第一章^{だいちよう} サヨと、ばあちやと

まつ林のつらなるおかが、ゆるやかに、そのまま波^{なみ}うちぎわへとつづく、この海^{うみ}べは、砂^{すな}があらく、石が多い。ところどころに白っぽい岩^{いかり}はだかのぞき、そこだけするどく切れこんだ入り江^{いりえ}がひとつ。――

三十年ほどまえまでは、この入り江^{いりえ}のまわりにも数戸^{すうこ}、漁^{りよう}によってくらす家^{いへ}があつた。けれど、戦争^{せんそう}で、はたらきてがいなくなつて、しぜん、船の出入りもとだえた。いまでは、うちすてられた木の船^{ふね}が二つ三つ、せまい砂^{すな}はまに、ころがつているばかりだ。

入り江^{いりえ}のおくまつたところに、まつの木にかこまれて、小さなほこらがある。ずいぶん古くからのものとみえて、はしらなど灰色^{はいいろ}にくすんでいる。むかし、漁^{りよう}にでる人たちのぶじと大漁^{たいりよう}とを



いのつて、そこにおかれたのだろう。が、いまは、もう、このほこらに、おまいりする人のすがたもない。

サヨは六さいの女の子、その入り江^え近くの家に、おばあさんとふたりきりですんでいる。

おばあさんは、かなりのとしだ。こしがまがり、つえをついている。

だから、サヨは、よくはたらく。朝からばんまで、一日じゅう、小さなからだをうごかしている。

「ばあちゃ。朝めし、食うど。」

サヨは、とつてのついた鉄^{てつ}なべを、まるい飯台^{はんたい}の上におく。おばあさんは、むつつりとだまつたまま、おくのへやからでてきて、のっそりと飯台^{はんたい}のまえにすわる。

ふたりで食べる米の量^{りょう}は、一回ぶんが、ちやわん二はいである。

その米は、おばあさんが、月に三度^{さんど}くらいのわりで、どこからか、もってくる。たりなくなることは、まず、ない。

「ほれ。米、もううてきたぞ。」

おばあさんは、それがじぶんの責任^{せきにん}のぜんぶでもあるかのように、このときばかりは大きな

声でいう。

毎度のことだが、その声をきくと、サヨは、なんとなくうれしくなって、ごそごそと、ごはんをたくじゆんびをするのだ。

電気炊飯器などないから、とつてのついた鉄なべに、朝と昼二回ぶんの米をいれ、水をいれて、ふたをする。そして、上下左右によくふり、米つぶがこぼれおちないように気をつけながら、にごった水をだしてしまふ。

それから、あらたに水をいれ、指で水の量をはかって、またふたをする。あとは、鉄なべを、かまどのにつけて、火にかけるだけだ。ガスではなく、かれえだや、こつばをもやす。たきあがったごはんは、うっすらと、こげがにおう。

おかずは、汁ものと、だいこん葉のつけものだ。夕食には、魚がくわることもある。

汁もの、これはサヨにしかつくない、栄養満点の、いわば「サヨ汁」である。海そう、魚のほね、やさいの切れっぱし、そのほか、あるものをいっしょくたに、アルミなべにいれ、ぐつぐつとにたてる。

だいこん葉は、米とおなじく、おばあさんが、どこからかもってきて、しおづけにしている。魚も、やっぱりおばあさんが、たまに、どこからか、新鮮なものをもってくる。

「ばあちゃ。ふろ、いるけ。」

いつものように食事のあとかたづけをしながら、サヨはいう。

おばあさんは、だまったまま、うなづく。

サヨは、小走りに庭へでていく。そんなにひろくもない庭だが、なかほどに、ポンプ井戸がある。

バケツをおいて、水をくみあげる。六さいのサヨには、ポンプの柄が高すぎるが、ちゃんと木ばこの足台を用意している。

小さなバケツだから、水は、すぐにあふれてしまう。よいしょともちあげ、庭のすみにあるふろ場に、はこびこむ。五右衛門ぶろというやつだ。小さなバケツで、かつきり二十ばいぶんの水がはいる。サヨは、あせびつしよりになつて、作業をつづける。

おばあさんは、いつのまにか、つえをついて、どこかへでかけている。

ふろに水をみたすと、サヨは、ひとやすみする。それから正午までの小一時間ほどが、サヨの、日のうちで、いちばんすきな時間だ。

家のまえのほそい道は、左のほうへいけば、七分ほどで、町の鉄道駅のうらてにつうじ、右のほうへいけば、五分たらずで、喫茶店サロン・ド・テへの坂道とまじわり、そこからぐるりとま



がつて、遠まわりに十五分ほどで、町なかになつする。

サヨは、駅えきのうらてのほうへ足をむける。そして、とちゅうから、まつ林のなかのふみわけ道にはいり、おかづたいに歩いていく。

このおかが切れるところに、鳥のくちばしのような入り江えがある。

そこは、夏でもひんやりとした空気がただよい、くいこんだ海の水は、まわりのまつ林のかげをうつして、あわいみどりの色にすきとおっている。せまい砂すなはまには、すてられた木の船が三つ、そのうちの二つは、うらがえしになっている。

ここを知っているのはじぶんだけだと、サヨはおもう。じっさい、これまでの一年ほどのあいだ、サヨは、ほとんど毎日、正午までの小一時間をその入り江えにすごしたのであったが、まだ、だれのすがたもみていない。

サヨは、あらためて、じぶんだけの入り江えをみまわす。

左手はおか、右手はきゆうな岩いわかべ、うしろをふりむくと、ふかいまつ林（ほこらは、まつの木と雑草ざくそうとにかくされて、みえない）で、おかよりに、わずかにふみわけ道の口がのぞく。

ここにこんなすてきな入り江えがあると、いったい、だれが気がつくことだろう。サヨの顔に、えみがうかぶ。